三重大学教育実践総合センター紀要　2006,　第26号,　13－18頁

描画にみる変貌する子どもたち

―「家・木・人」描画（S－HTP法）の徹底分析に向けて―

小山内　實*・玉田　尚子**

2005年、著者の一人玉田は、統合型HTP法と簡易版精神的回復力尺度を用いて一般の小・中学生と施設養育児の心的適応性およびレジリエンス（困難事への対処力）の関連について考察を試み、その成果を「日本教育心理学会」で発表した。今回は、その時に用いた計326名に新たに103名（中学生90名、施設養育児13名）を加え、対象者の描画そのものを、今一度、描画全体で何が示されているのか一枚ずつ検討、吟味してみた。つまり、前回の考察に加えて今回は、いわゆる付加物にも注目し、描画全体の持つ意味を再検討してみた。今回は、とりわけ、「半スティックフィガー」現象と、付加物のひとつとみなされる「太陽アイテム」に焦点を定めて検討した結果、付加物をも考察することで、つまり描画を前回よりも深く分析することで、指摘されて既に久しい「子どもたちの危機的変貌」を一層鮮明に確認できた。更に「S－HTP法の徹底分析」の全体と、「描画から物語へ」という新しい方向性が示唆された。

キーワード：S－HTP法、半スティックフィガー、淋しい太陽、子どもの危機的変貌

1．はじめに

「“切れやすい”小中校生が確実に増加する一方、無気力・無表情・無感動の子どもたちも目立つ」、「最近子どもたちが荒れて授業が成り立たないクラスも珍しくなくなった」といった「子どもたちの危機的変貌ぶり」が指摘されて既に久しい。こうした危機的状況を伝える報告は年を追う毎に増加の一途を辿っており、例えば、産経新聞が第一面で「小中学生の6割が自分もいつか切れる。自分が好きだという肯定的回答は男女とも中学生では5割を切った。子どもたちの過半数がここ1～2ヶ月間で心打たれる感動体験をしていない」という民間教育機関の調査報告を報じている（2004. 7. 25）。暴力傾向に関しては、「文部科学省、2003年度に公立の小学校内で児童の起こした暴力行為件数が前年度比27. 7%増の1, 600件」と発表している（2004. 8. 28.　中日新聞）。

こうした結果は、アンケートに回答された数字を基にまとめられたり、あるいは、聞き込み調査（時に不正確な数字が紛れることがある。もちろん、適切な統計処理も行われていて事態を正しく反映している報告があることは論を待たない）で行われることが多い。

我々は、上記の現状に鑑み、「子どもたちの心的生活世界」つまり、子どもの心理的危機や適応の状態について更に深くかつ具体的に理解しようと考えてきた。そうした方法として、玉田が昨年、日本教育心理学会で行った発表内容の素材は、描画S－HTP法を用いたものである。今回の考察もこの方向に沿うことになるが、テーマについて論ずる前に予め確認しておくべき事項を三点にわたって述べておこう。

2．予備的考察

(1) 我々のS－HTP法の進め方と考え方

我々のS－HTP法のやり方は、Buckの源法や三上の手法と多少異なっている。鉛筆でなく、クレヨンを用いて、最初に「家と木と人を入れて何でも好きな絵を自由に描いて下さい」という教示を行う。だから「家」、「木」、「人」を描き入れるという約束以外は全て被験者の自由に任されている。

①課題画と自由画の特徴、および両者の混交の問題

だから、S－HTP法は決して課題画に尽きるものではなく、課題画でありながら自由画の性質も兼ね備えており、それだけ被験者の心理的負担が軽減され取り組みやすくなっている。S－HTP法を課題画として考えた場合、3つのアイテム自体は変更できないものの、アイテム同士の関連付けはあくまでも自由であって、そこに、さまざまなイメージが投影的に絵の中に表現され、子どもの心理状態がより適切に理解されることになる。

さらに自分の描きたいものを自由に描き加えることが保証されることによって、つまり自由画の側面がそれに加わって、投影・イメージされる無意識の内実がより一層豊富になり得る。だから、課題画という方向性を保証することでアセスメントという形を取りながらも、同じその絵の中に自由画としての表現内容を本人が無意識裡に描くことによって、自己治癒的な方向性を持ち得ると言える。

* 附属教育実践総合センター
** 伊勢市立北浜中学校

そこに描かれた内容が例え悲惨なものであっても「ホラーもの」のような現実離れしたものであっても、画面に表現できたということ自体を、パートナー（通例はテスターと呼ばれる人）は評価し、描画中に心に浮かんだことや感じたものは何であったかなど描画後に本人に質問しながら、描画という行為全体をサポートしていくことが最も大切なことではないだろうか。つまりS－HTP法を分析するに当たっては、決して表現されたものを単に課題画の内容に過ぎないと考えたり、個別に解釈・評価していくだけではなく、あくまでも描画を全体として、換言すれば「子どもの生活世界全体の表現」として検討していくことが必要なのである。

②彩色をめぐって：単色、多色、鉛筆、クレヨン

描画の道具として単色の鉛筆でなく多数色のクレヨンを用いることについて触れる。現実に存在するものには全て色がついている。そのため、事物を描くとき、形だけを描くよりも彩色したものを表現する方が容易ではあるまいか。少なくとも年齢の低い子どもの場合や知的な面で遅れのある子どもにとり、単色の鉛筆よりクレヨンで描く方が取り組みやすいように思われる。また、現実的で精密な描写が要求される場合、どうしても鉛筆の方がクレヨンよりも選ばれやすい傾向があるだろう。もちろん、描線の太さが関係していることがその一要因かも知れない。

このようにクレヨン画は、一方では現実の事物や風景を表現しやすい性質を持っていると同時に逆にまた、はるかに現実から距離をとりやすい性質も併せ持つ、つまり現実より幻想への傾向が高まる可能性（例えば、鉛筆で描かれたシャガールの傑作などは想像できるだろうか）があり、厳しい現実に直面している子どもにとっては、クレヨン画の方が現実から一歩離れてイメージの世界に遊ぶことが容易となるであろう。

さらに、子どもが困難な心的現実を表現する場合に、物の形より色で表すということが容易である場合が多い－例えば大抵の子どもは、『パパの色はどんな色?』、『自分の今日の色は?』と聞かれると即座に、あるいは一瞬、間をおいて回答してくれる－事実を我々は重視している。一般に描画の分析においては、どんな色彩か、どのように彩色されているか（色使い、塗り方の特徴）に十分注意を払うだけでも、子どもと子どもを取り巻く環境との関係性や状況性についても十分推し量ることが可能な状況が比較的多いのである。

(2) 描画に現れる「太陽」の正体

幼児の描いたものであれ、小・中学生のものであれ彼らの描画を見る機会が多いほとんどの大人が気づいている現象がある。それは、指示や誘導もされていないのに、さらに他の幼児のまねでもなく、かなりの幼児・児童が太陽のアイテムを自分の描画に“自然に”入れているという事実である。

しかも単に丸い形のもの（大人は視力だけで『太陽』を知覚し丸い形に仕上げることで完了する）を表現し完結するのではなく、必ずと言っていいほど、丸い形のものと同時に、太陽から直接延びている直線や曲線を太陽そのものと一緒に描くのである。この現象を、小山内は「太陽のお手て」と呼んで－学会発表もしていないし論文にもしていないが－学生の授業で「幼児の描画」の一特徴として説明している。まるで「太陽と太陽のお手て」のアイテムを欠いては、もはや自分の絵とみなすことはできないとでも言いたげに、「太陽と太陽のお手て」を多数の子どもたちが描くのである（図1参照）。

大人では自覚的な絵画制作以外では決して描くことのない「太陽のお手て」とは、子どもたちにとって一体、何なのだろうか。机上の思案では解けないこの謎は、子どもたちと暖かい日に戸外に出て、子どもたちと一緒に写生をしてみると、その正体がたちどころに分かる。

子どもたちにとって、太陽は形が丸くて赤や橙色（黄色）をしている視覚の対象というより、何よりもまず「ポカポカ」と暖かさを感じさせてくれるものなのである。子どもは太陽に対して視覚以上に、触覚的に温かさを覚えているのである。つまり、味も素っ気もない表現を使えば、「太陽のお手て」とは、太陽の放出する「輻射熱」のことだったのである。もちろん、物理的事象として捉える子どもはいない。あくまでも、生きている自分の感覚なのである。つまり、暖かさの原初的なイメージとして、「母なるもの」として無意識裡にとらえているのだ。だから、これ以上理論的に立ち入る必要はないだろう。ここでは、「元始女性は太陽だった」と宣言した明治時代の日本初の女性解放運動の先駆者であり、与謝野晶子との激しい論争を展開した「母性論」の論客、例の青踏創刊の平塚雷鳥の思想を思い起こすだけで十分であろう。

(3) スティックフィガーをめぐって

子ども達の描画を見ると、スティックフィガー（人間を描線だけで表したいわゆる棒状人間、記号としての人間のこと）は小学校の低学年（1～2年）・中学年（3～4年）においてほとんど見られないのに、高学年（5～6年）になると増えていき、中学生ではすでに大半が描くようになる。

これまでは、描画に表現される人間的なものは「スティックフィガーであるか、そうでないか」という分け方が一般的であり、スティックフィガーは単に何らかの心的問題を示すものだという見方がなされてきた。しかし、最近の子どもたちが描く描画を見ると、もはや「スティックフィガー」としてひとくくりにはできない。これまで

の「スティックフィガーであるかそうでないか」という二分法に、さらに「半スティックフィガー」という概念を設けて人物画を考えていかねばならない現象が現われ始めたのである。このスティックフィガー現象については、次に詳しく論ずることにする。

ここまでは、本稿の論述を進めるのに重要な観点を予め三点にわたって述べた。最初に、最近の子どもたちの心的変貌を的確に表現していると我々が注目している二つの現象を取り上げ、さらに両者の関連性を考察していこう。

3.「半スティックフィガー」の登場

最初に取り上げるのは、S－HTP法の必須のアイテムの一つ、「人」に関したものである。「半スティックフィガー」とは、具体的には、いうならば、「表情を持つスティックフィガー」のことである（図2)。

この「表情を持つスティックフィガー」をどうとらえればよいのであろうか。顔（表情）というのは人物画においてはもちろん最も重要な要素である。それ故、顔（表情）が描かれていれば、厳密にはスティックフィガーと呼ぶことはできない。むしろ「簡略化（された）人間」と表現されるべきものと考えてよい。この「簡略化人間」は、まさに現代の子どもの幼児性が映し出されていると考えることができるのではないか。我々が幼児性という言葉をここで持ち出したのは、子どもの発達心理について考えると、人間を顔だけでとらえている時期、つまり人をほとんど顔のみで認識する時期（誕生から処女歩行までの時期）があるからである。赤ん坊がやがて立って歩けるようになってくると、人間には手があり足があるのだということが分かり、人を全体として認識できるようになってくる。このように、「表情を持つスティックフィガー」つまり「簡略化人間」については、人を顔で認識する幼児の心理状態と共通するものがあると認めてよいであろう。

また、どのような表情であるかということも問題となる。表情はコミュニケーションにおいて最も重要でかつ効果をもたらす媒体であることはコミュニケーション論の常識であろう。だからこそ無表情（無表情という表情）であるのか、笑っているのか、つらそうな顔をしているのかなどを見ていくことによって、周りの状況をどうとらえ、他者や対象物とどのような関わりを持とうとしているのか知ることができるのである。

次に、人物を簡略化させて描くということについて考えてみたい。現代はいろいろな文化の領域で記号化が進んでおり、子ども達は生後直後から記号の世界（記号化）に慣れ親しみ始めていると言えるであろう。しかし、記号というのは、その使用者達がお互いにその内容、意味を分かり合っているという前提があって使われるものである。この前提がくずれると、簡略化は一部の人にしか伝わらない、或いは正確に相手に伝わらないという弊害を生ずる。人間の記号化、あるいは簡略化というのは（もちろん、特定の学問領域ではむしろ必要な場合があることも、また特定の団体では日常的にそれぞれ“業界記号”としての人間が表現されていることもあるが)、現代の子どもがひとりひとり精神的に自立した主体を確立しておらず、相手をも自分と同じような“半主体的な人間”としてみていることを示していると思われる。つまり相手を言わばグループの一員として捉えていることを物語っているのではあるまいか。このことは子どもだけに言えることではなく、人間関係をうまく構築できずに傷つく若者の姿やいわゆるNEET（ニート）とよばれる若者たちを多く生み出している現代社会の文化的風潮を象徴しているのかも知れない。

一方で簡略化は社会や人間関係からの逃避的傾向を表しているとも言えるのではないか。高学年になるにしたがい、他人からみるとどんなにささやかに見えようとも、本人自身にとっては、「退っ引きならない厳しい現実」と嫌が応にも向き合うことが多くなる。つまり、現実に立ち向かい克服していく意欲の低下、一言で言えば「生きる力」の低下、脆弱性が、無意識裡に簡略化人間を多く描いてしまう心性として働いてしまうと考えられる。

4．付加物の吟味：「淋しい太陽」の出現

S－HTP法は、もちろんそれぞれ3つのアイテムから心的状況を的確に捉えることのできるテストであるが、むしろそれ以外の部分において心的状況が非常によく表れていると思われる描画が結構多数存在する。それ故、個々の描画において「家」、「木」、「人」以外の部分が何を表しているのかを3つのアイテムに加えて読み取ることが大切であると考える。つまり、S－HTP法は付加物を考察することによっても、その描画の意味をより深く理解することができる描画テストと言える。

＜太陽＞

付加物の中で特に共通して多く描かれているものに太陽がある。太陽とはその代表が母親であり、対象としての「愛」の象徴だと考えて差し支えない。太陽を描くのは幼児、小学校低学年において多く見られるが、その後、成長と共に減少していく。つまり、発達心理学的には次第に自立（律）の方向性をたどるのである。先行研究によれば中学生で太陽を描くのは14%（三上、1995）となっているが、昨年度（2004)、我々が実際に描画してもらい、それを吟味した結果、中学校1年生は73%、中学校2年生は61%、中学校3年生は66%もの多数の生徒が描いており、驚くべきことに、ここ10年ほどの間に太陽の描写が極端に増加していることが分かる。この短期間に一体、彼らは太陽とそのお手てを何故にたく

さん描かねばならなくなったのだろうか。既に予備的に考察したように、太陽とその手は愛情の象徴であった。渇望しても、その愛情が現実には得られないので、せめて描画の中で「愛されたい」と叫んでいるのであろうか。

まず太陽の描かれ方について、見ていこう。

①太陽の画面に占める割合が異常に大きく、色も原色でしっかりと塗られている。

灼熱の太陽に焼かれているような自分がいる。あるいは、光を投げかけてくれる人がほしいと強く願っている。今一番ほしいのは太陽（自分に確かに注がれる愛情）なのかも知れない。

②太陽の擬人化が鮮鋭化している。

いつまでたっても渇望する太陽が手に入らないのではないか、どこまでも愛されないのではないか、という不安な気持ちが投影されていると思われる。

③赤く塗られた太陽の上にさらに黒く色をつけたり、黒の斜線が入ったりしている。

太陽を無意識裡に隠蔽しようとする意図が感じられる描画である。光の遮断は、自分に対する愛情が遮られている状態と解釈できる。母親の愛情を求めながらもそれが感じ取れない不安感を抱いている、さらには、母に対する恨みにも似た気持ち（もっと愛情を注いでほしいという思い）ととらえられる。

④太陽の塗り方が不十分である。

太陽の弱々しい描写には、どことなく独特の寂しさが感じられる。希望をしっかり抱けないでいる状態であろうか。

⑤太陽が楕円形であったり、太陽の手（光線）が不揃いであるなど完成度が低い。

現実に対して不満足な心的状態である。言い換えれば、「愛されることを断念したものではなく、自分自身に向けられる愛情の方向とその強さに対するこだわり」が十分残されている、と解釈できる。

⑥太陽が渦巻き状に描かれている。

他のアイテムが豊かに明るく描かれているものが多いが、やはり問題がある絵だと考えられる。なぜなら、渦巻き状に描かれた太陽は、簡略化された太陽であり、太陽（愛の象徴）が被験者の心の中で軽く扱われていることを示すものだからである。

⑦太陽が橙色で彩色されている。

なぜか家の屋根が三角の形を取り、赤く彩色されているものが多い。絵の中の他の部分に肝心の赤が用いられているのに、太陽は赤く彩色されていないのである。これはどのようなことであろう。

⑧二つの太陽が描かれている。

被験者の心の中で、母親が二つの顔（良い母親と悪い母親）を持っている。発達の段階において何らかの問題があったことがうかがえる。

⑨太陽が描かれながらも光が人に届いていないように思われる。

愛情が自分以外の人に注がれていると無意識のうちに感じている。場面分割が見られたりする。

以上、種々様々な太陽が描かれているが、これは、子ども達が「太陽」に象徴されるものを求めているということに間違いはなく、安心感、充足感を抱けずにいて、母親や周囲の人の愛情を求めている姿が浮き彫りにされていると考えないわけにはいかない。

5.「半スティックフィガー」の登場と「淋しい太陽」の意味するもの

4. と 5. で多少詳しく論じた、一部簡略化された人間、いわば「半人間」の現象と、描画の中に驚くほど多く表現され、かつ“別な色彩で汚く落書きされた赤いものばかりでなく黄色く変色した太陽”アイテム。両者の間には何か関係があるのだろうか。あるいは通底するものがあるのだろうか。

実は、多くの子どもたち自身、それだけでなく大人たちも、つまり日本の人間全体が、否、一部の世界の人達が既に大きな不安をもち始めているのではないだろうか。もちろん一部の人間にすぎないが、人間が少しずつ壊れていくのではないか、という不安である。

ここに、そのことを雄弁に物語っている新聞記事がある。「日本子ども社会学会」による「明日もきっといいことがある、そんな希望を抱いて眠りにつく小学生は三割程度にすぎない」という実態がその内容だ（2004. 6. 13 中日新聞）。大多数の子どもが、大人の価値観を押しつけられそれに納得も反感もできず、将来に希望をもてず、既に小学生にして、まだスタートに立ってもいないのに、「人生からの退却」への道をそれとは知らず大人たちによって、歩み始めさせられているのが本当のところではないだろうか。

しかし、こう述べたからといって我々は悲観論者ではない。これまでの歴史がはっきりと証明しているように、全ての人間が壊れてゆく事実はあり得なかったからであり、将来もあり得ないことだと思われるからである。第一、かなりの子どもたちには、大人の「困難事への対処力」とはまた違ったレジリエンス（大変な困窮事にあってもそれを乗り越えていく回復的弾力性）が備わっている。このことについては、玉田が 2005 年「日本教育心理学会」の発表において、周囲の、もちろん子どもたちも含めた、大人たちの支援や援助により子どもたちが大きく伸びる可能性を有することを指摘している。

ここに、様々な事情で自宅ではなく養育施設での生活を余儀なくされている子どもちがいる。真の家庭というものを知らず、家庭から放り出されてしまった子どもたちの

ことである。彼らに描画をお願いすると喜んで描いてくれるのである。彼らはどんな描画をするのであろうか。その際、レジリエンスは、どのように作用しているのであろうか。

6．施設養育児のS－HTP画

施設において養育されている子どものほとんどは、主として虐待、ネグレクトの被害者であり、かつ両親間の問題に巻き込まれる形の多くの問題を抱えている。子ども達のほとんどは、家（house）という形で表される真の家庭（home）というものを知らない。S－HTP法は子どもと子どもを取り巻く環境との関係性をとらえるのに適した描画テストであるため、子ども達が家庭をどのように見ているか、自分の中にどのような感情を持っているかをよく知ることができる。

施設養育児の描く家は、ミカン箱であったり、極端に小さな家であったり、不安定な家であったりすることが多い。また、3つのアイテムが羅列的に描かれている絵が多く統合度が低い。統合度が低いということについては、ものごとの関係性をとらえる心の働きが十分でないということであり、感情のまとまりに欠け、情緒的にも問題があると考えられる。描画してくれた子どもの中に色彩画を描くときに、前もって鉛筆で下書きをしようとする子どもがいた。その子はどうして鉛筆で下書きしたいのかを尋ねられて、「間違えたら嫌だから」と答えていた。ここに自分に自信を持つことのできにくい子どもの姿がうかがえる。また、彩色をするときに少数ではあるが、家だけ無彩色であったり人物だけ無彩色であったりするなど、特定のアイテムだけを無彩色にし他のアイテムは有彩色であるという特徴的な描画法が見られた。そうした子どもたちに「色は塗らないの?」と尋ねると「塗らないの。」とか「ここは、これでいいん。できた（完成したという意味）。」と答えていた。彩色という作業は、本来、自らに彩りを添えてゆく、つまり感情、情動を吹き込み生命を与えていく作業（皆藤、1994）と言われるが、無彩色の家や人物はエネルギー水準の低さや自己像の危うさを象徴するものであろう。

①A子（小3）について〔図3〕

A子の絵は性的な心的外傷を伺わせる。無着衣の女の子と男根にも似た木が描かれる一方で、ハートマークやキャラクターが描かれている。虐待などを受けた現実と虐待などのないユートピア的な幻想の世界の混在がある。A子は、勉強に全く集中できない子どもであるが、絵を描くことだけには随分集中していた。そして、「できた！」と言って得意そうに図3の絵を持ってきた。「ゆがんだ愛の形であれ、自分の置かれている厳しい現実を余すところなく表現できた、再現させることができた」という意味の「できた！」という言葉であるのかも知れない。

②B子（中2）について〔図4〕

B子も物事に集中できない子どもである。牛乳を飲むときも少し飲んでは休んだり遊んだりしてきちんと最後まで飲もうとしない。何でも途中で放ったらかしにして、職員の指示もなかなか聞こうとしない。虐待をうけたため、小さい子の泣き声などに鋭く反応しパニックを起こすことがあった。これまでお風呂場で泣く同じ施設の子を浴槽に突き落としてしまうという行動を取ったこともある。愛されたいのに愛してもらえない寂しさから、わざと人が嫌がることをし、関心を引こうとしたりするところがある。そんなB子も絵を描くときは、非常に集中し熱心に取り組んでいた。鮮やかなまでの色彩の用い方に特徴がある。そして、描画後、熱心に絵について語ってくれた。普段押さえているものを何とかして表出したいと思っているB子の苦しさが伝わるようであった。

7．考察と結論

我々の行なっているS－HTP法は、既に述べたように比較的自由度の高い課題画である。「家」、「木」、「人」という3つのアイテムを入れるという約束はあるものの、それをどのように組み合わせてもよく、どのように描くこともできる。S－HTP描画の最初の教示時、必ずと言っていいほど、「他に何を描いてもいいんですか。」「字も一緒に書き入れてもいいですか。」などと質問をしてくる子どもたちが何人かいる。「それはあなたの自由です。」と伝えると、子どもたちは笑顔になって、「HTPにさて何を描き加えようか」と考え、自分の頭の中でイメージを膨らませ、いろいろな場面や物語を構成したり物語の筋書きを作ろうとする。

重要なことは、その場面や物語は自分自身とかけ離れたものではなく、必ずそこに何らかの自分自身の生育史、現実に直面している問題、未来への夢や希望の感情が投影されている可能性があるということである。もちろん、回数を重ねていって始めて、描画の細部の意味に気がついたり、描画全体が表現しているものへの理解が完全になったりすることもある。子ども達は、言葉ではうまく表現できない内容の物語を、描画中に無意識裡に創作表現している事も多いのである。

ある子どもは、描画中に自分の方から、いわば問わず語りに、描画についていろいろと説明を加えてくれた。普段、自分自身をあまり語ろうとしなかった子どもだったのに、描画行為を媒介にして始めて、自分の気持ちを素直に表現できたようだった。別な子どもはいろいろな思いや物語を絵の裏に文字で分かりやすく書いてくれた。描画行為全体を通して心が言わば開放（解放）されていくのである。

描画したり文章に表現したりする行為は、一方ではアセスメントの一方法であると同時に、それ自体癒しの萌芽を含んでいる。子ども達にいきなり文章を用いての表現を要求することは難しい。しかし、描後や描画中に物語ってもらうと容易に表現が可能になる子ども達もいる。こうした意味で描画というのは、その子の持っている問題の本質を明るみに出すきっかけとなり得るのである。

8．おわりに：残された課題

はじめに、で述べたように、我々は、指摘されて既に久しい、子どもたちがおかれている深刻な「心理的危機や適応状態の現在」をさらに理解を深めるために、アンケートや聞き込みよりも、もっと具体的で奥の深い方法として、「家・木・人」描画（S－HTP 法）を選択し、かつ今一度丹念に検討・吟味してみた。その結果、行動や数字で理解する方法では表面的にしか理解できない、またことばではうまく表現できない子どもたちの、本当の気持ちを理解できたように思う。

今回、検討する中で課題が山積していることを今さらながら再確認させられたが、現在我々が重要だと考えている二つの課題をあげておきたい。ひとつは、S－HTP 法を超えた、描画法全体に関わる、課題画が含む自由画性の問題であり、「自由画を描いてください」という教示の内包と外延の問題である。今ひとつは、「描画から物語へ」という新しく示唆された方向性である。もちろん、こうした方向は決して全く新奇なものではないが、いまだ十分には論じ尽くされてはいない問題である。

文　献

Buck, J. N.　1948　The H-T-P technique-A qualitative and quantitative scoring manual. *Journal of. Clinical. Psychology*, 4, 317－396.

稲田圭子　2003　S－HTP を用いた学童期・思春期の心象世界への接近 ― 樹木・動物の描画変化との関連から ―　島根大学教育学部心理臨床・教育相談室紀要 2, 63－72.

皆藤章　1994　風景構成法　その基礎と実践　誠信書房

三上直子　1995　S－HTP 法－統合型 HTP 法による臨床的・発達的アプローチ　誠信書房

三上直子　2002　描画テストに表われた子どもの心の危機　誠信書房

根本旬子　1998　統合型 HTP 法における 3 アイテム間の位置関係とロールシャッハ・テストの体験型との関連　ロールシャッハ法研究, 2, 33－43.

小塩真司・中谷素之・金子一史・長峰伸治　2002　ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性－精神的回復力尺度の作成　カウンセリング研究, 35, 57－65.

酒木保, 吉沅洪, 小山内實　2002　色彩ブロットから物語構成にいたる一治療法　Japanese Bulletin of Arts Therapy, Vol. 33　No. 2

玉田尚子・中谷素之　2005　教育心理学フォーラム・レポート『子どもの養育環境と心理的危機、レジリエンスに関する研究』日本教育心理学会

平塚雷鳥　1911　発刊の辞　青踏

資　料

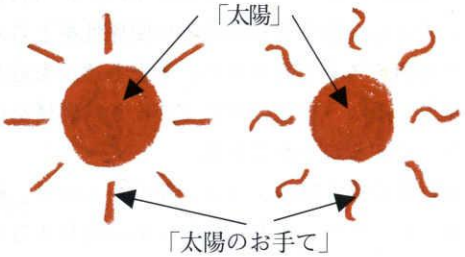

図 1　太陽と太陽のお手て

図 2　描画に見られる半スティックフィガー

図 3　A 子の描画

図 4　B 子の描画